

《月々の手入れ》

【6月】

春に咲き誇ったばらは6月に入ると1番花は順番に終わってきます。中には、6月上旬まで咲いている遅咲きの品種などでは、終わった花の咲き柄を早めに切り取ります。

6月から8月は、ばらが最も成長する時期で、年間を通して重要な時期ですので、手を抜かずこれまで以上に肥料、水、消毒など日常の管理をしっかりと行いましょう。

6月の主な作業

1. 花柄切り
2. 施肥
3. シュートの処理
4. 灌水
5. 消毒
6. その他

1. 花柄切り

春の一番花が終わったら花柄は早めに5枚葉の上でカットします。切り残った5枚葉の付根から次の花枝が伸びてきて約1か月後には次の花(2番花)が咲きます。

切る枝の位置は品種ごとに花枝の長さが異なるので、切った後伸びる2番花の咲く位置を想定して切ります。

FLなど房咲品種は花を楽しみながら花柄を切ると枝によって切る時期が異なり、2番花は一斉に咲きません。2番花も一斉に楽しみたいなら、ある時点で咲いている花もすべて同時に切り取るとよいでしょう。

2. 施肥

(1) 地植え

花柄切りが終わったら、早めに肥料を与えます。ここからはシュートの発生を促すため、冬元肥のリン・カリ中心よりも窒素を含んだ肥料を与えます。与える量は冬季元肥の半分から1/3ぐらいですが年間施肥量を目安にあまり多すぎないようにします。いずれにし

ても、秋の花まで肥料過多にならないよう、即効性で肥効が残らない有機ボカシ肥料または有機配合肥料(有機に化成肥料分を配合した肥料)が最適です。決して窒素・リン酸・カリ分が10:10:10を超えるような化成肥料は使用しないこと。化成肥料は長い目で土壌塩基化し痩せる原因となるので常用は避けましょう。

シーズンを通して強いカリ分は白根を傷め致命傷となります。

(2) 鉢植え

地植えと同様に窒素分を含んだ有機ボカシ肥料または有機配合肥料を与えます。

鉢植えは水遣りで栄養分が底から抜けていますので、標準1か月に1度の置き肥と1週間に1度の液体肥料を与えます。特に新苗や2年苗は株を大きく太らすことから、もっと短い頻度で置き肥をします。

3. シュートの処理

6月から8月の中旬までばらは株元から新たな新枝を発生させ成長します。これがいわゆるシュートと呼ばれる枝で、秋から来春に最も良い花を咲かせる主幹枝となるものですから、大切に育てます。

(1) シュートの処理

株元(クラウン(ベイサルシュート))または現状主幹枝の比較的株の方から赤い太めの新芽(サイドシュートまたは途中シュート)が出てきます。

この新枝は最も勢力が強く、成長が早く放置しておくとかやがて蕾を形成しその周りにも小さな蕾をいっぱいつけるほうき状の枝となります。

こうならないように、毎日観察し、最初に本葉(5枚葉)が5, 6枚出たらピンチ(先端を指先で折る)します(基本)。またはHT高性種などは本葉の数を意識せずとも15cm~20cmで早めにピンチをします。(必ず指で折るソフトピンチ)

早めのピンチでは先端は5枚葉の区別がつかないが指でソフトに折るとしばらくして先端の5枚葉の位置から再び枝が伸び出し、同じように本葉が5, 6枚伸びたら再びピンチします。このとき先端だけではなくその下の5枚葉からも同じように枝が伸びてきますが、主幹枝が勢いよ過ぎて太すぎる場合、意識的に2つ伸ばして二股に仕立てる場合もありますが、それ以外は他の枝は除去して、まっすぐ常に1本仕立てにして伸ばして行きます。これをデイシューティングといいます。

HTの場合はこれを3, 4回繰り返す、秋の剪定を待ちます。高性種では2mを超えますので強風でせっかくのシュートが根元からポロリと折れてしまいますので、しっかりとイボ竹にビニタイで固定

します。

5月の下旬から出た早めのシュートは5段以上伸びて高くなりすぎるので秋剪定まで花を咲かせて高くなりすぎないように調整する手法もあります。

理想は7月10日ごろ出るシュートで秋剪定までに3段になり最も剪定しやすくしかも最も良い花を咲かせます。

つるバラ以外すべての品種でこのようにシュートの処理を行います。

つるバラのシュートは冬までイボ竹で支えるか紐などで固定し強風で折れないようにします。



(4)シュート発生方法

新苗や2,3年目の若株は普通にシュートを出して成長しますが、3年以上経過してくるとシュート発生率は極端に悪くなります。品種にもよりますが、シュートが発生しずらくなったら以下のような処理を行います。

- 冬の元肥のリン酸・加里肥料を通常の倍ぐらい投入します。FL類はこの方法によります。HTの春花は乱れるので春花勝負ではない品種に限ります。(5,6月春花の咲いている最中からシュートが出ることが多い)
- 冬の元肥に完熟乾燥馬糞堆肥を500g投入し、夏にも250グラム投入します。(古株で5,6月に出なくても翌年以降の体力を蓄える冬に古株は株から約30cm周囲をスコップで根を切ることです。)
- 冬にシュートが出なくなった古株の周り30cm、深さ15~20cmほど土を掘り起こして捨て、赤玉大7:腐葉土3ぐらいの土と入替えます(約15ℓ程)。
- HTの春の1番花がダメな品種は咲かせないで、思い切って蕾を全てピンチします。
- 6月よりディシューティング=新梢の蕾が見える直前にピンチを繰り返し、脇芽は全て欠き取る一本仕立てを実行し、2番花を咲かせ

ないようにします。

○ディシユエーティングは4週間が限度です。それ以上行くと脇目が出にくくなり本剪定で芽の発生の遅れとなります。

○6月下旬から7月上旬にかけて枝の1/3～1/2まで切り戻す。

○夏肥料に窒素を含んだ有機ボカシ肥料（6月中に1回のみ）、及び有機液体肥料（8月上旬まで）を規定の倍の希釈で定期的に3回以上与えます。（鉢ばらに液体肥料を与える機会を利用するとよい）

○12月の元肥投入時に土壌酸度をPH5.5～6.0にすします。（鹿沼土又は未調整ピートモスを使用する）

○株元（クラウン部分）に充分太陽光が当たるようにします。その方法として、

○太陽光を遮断する最下部の葉、本葉1，2枚を切除する。

○それまで出たシュートが2段目から3段目まで成長したら、それに見合う古枝を根元から切除し（整枝）、株を繁茂させず、すっきりと光を株元へ届きやすくします。

○地植え新苗の肥料は、深い位置に投入せず表面に撒きます。

○深植えは禁物。株元が埋まっている株は、周りの土を取り除くか12月に持ち上げるとよいです。

○春花が終った枝から新芽を伸ばさない処理を繰り返す。

○冬に古い主幹を一段目下部（2芽残して）で強剪定する。又は株元より切除する。主幹枝を少なくし新シュートの出る場所を作ってやる。

○夏の地温（地温の最適温度は20℃～25℃）を下げ、接ぎ口付近を多湿にするマルチングは有効。

○古い主幹全てをゆっくり横に倒す（先端枝をなるべく長く延ばすと倒し易い。地面と平行になるくらい倒す）と株元に光が当たり出易くなる。

○究極の方法は、主幹全てを底から10～20cmの位置でペンチで潰し折曲げる。

4. 灌水

今月の水遣りも先月と同様に表面が乾いたらたっぷりと与える。地植えでは10リットル以上、鉢植えは鉢底まで乾いたらたっぷりと与えるのは同じです。今月からは株元のマルチングはしっかり行いましょう。マルチング素材は地植え鉢植えとも一般的なもので何でもよいです。

鉢植えではコガネムシの産卵を防ぐため不織布や防草シートを鉢大に丸くカットして切り目を入れ使用すると便利です。

冬場は必要ないので必ず取り除くこと、わらなどの場合ハダニや害虫の越冬場所となるので要注意です。

5. 消毒

いよいよ高温期と梅雨期が近づくので、黒星病の予防をしっかりと行います。

黒星病は毎年最初に発生する品種が決まっているなら、その品種の鉢植えなら風上から風下に移しますが、地植えなど移動が不可能な場合はそのような品種は栽培を諦めて冬に退場を願うのが得策です。その株のために大切な他の株に蔓延し、取り返しのつかないことにならないようするためです。うどん粉病も同様です。

この時期に大切なばらの葉を落としてしまうと、成長に悪影響を及ぼし、秋のばらに不利とならないよう、黒星病やハダニなどの病害虫は早期発見が大切で頻繁な消毒より毎日の観察が何より大切です。

黒星病は発生してしまっただけの特効薬は現在サプロールが一番ですが、この薬品も先月説明したE B I系の同系統の殺菌剤なので、他のラリー、サルバトーレ、マネージ、ルビゲンと合わせて年6回以上使用しないこと(これらをローテーションしても効果は同じでありあまり意味がありません)

ハダニ剤は多種ありますが、現在卵から幼虫・成虫とすべてのステージで効果のある薬剤はダニ太郎(成分名マイトコーネ)とダニサラバです。これらは散布後翌日にはほぼ全滅に退治できます。

コロマイト・カネマイト・ニッソラン・コテツなど常用すると毎年ダニには耐性ができて効かなくなります。究極のこの2種類の薬剤を使用します。年2回以内なのでそれ以上は絶対に使用せず、後は毎日葉裏にホース先の如雨露水圧で飛ばす方が得策です。

6. その他

最近では当地での6月も比較的晴れた良い日が多く空梅雨となり梅雨入りが遅い傾向にあります。来月までばらはぐんぐん成長します。一部シュート発生方法にもありましたが、枝が茂りすぎて葉が多くなりすぎて風通しが悪くなり、病害虫の発生リスクを高くします。

来月は、必ずこの時期に秋に向かって行う不要枝の整理切り戻し剪定法について詳細に解説します。